学苑・日本文学紀要　第九六三号　九四～一〇八（二〇二一・一）

遠藤周作「影に対して」論

――季節の推移と「影」の変化――

笛木美佳

一

「影に対して」は長崎市遠藤周作文学館に寄託されていた資料の中から新たに発見された未発表小説であり、二〇二〇年六月二十六日にその存在がメディアで公表され、「三田文学」99－142号　夏季号（2020・8）に全文掲載された後、『影に対して　母をめぐる物語』（2020・10・30、新潮社）に所収された。公表された。この作品の執筆時期については公表時に既に「使用した原稿用紙に記された遠藤の住所から、1963年3月以降の執筆とみられる」（榎本瑞希「遠藤周作の未発表小説見つかる　死去後初の純文学作品」朝日新聞デジタル　2020・6・26、14時11分）と報道がなされたほか、山根道公「遠藤周作「影に対して」――封印した父の血と母の死顔」（「三田文學」99－143号　秋季号、2020・11）に詳細な考察がある。本稿では、主として本作の内容・構成について論じる。

作品は全二十四段落[1]で、妻近子と五歳の息子稔を探偵小説の翻訳の仕事で養う勝呂有造の、ある年の春から冬の手前にかけてのできごとが描かれており、その物語現在に対してほぼ交互に、回想が挟まれている。回想は時系列に直すと、母が若い頃、音楽の道に進むために家出をした話（母の従兄から聞いたもの、③段落）から始まり、勝呂自身の三十年前の幼年時代（⑤段落）、小学三年生（⑧段落）、四年生（⑨段落）、五年生（⑪段落）、六年生（⑫⑭⑯⑰段落）、中学生（⑲⑳段落）、十八、九歳（⑥㉒㉓段落）、学生時代（②⑦段落）となっている（末尾に付した「時系列一覧」参照）。こうした異なる時空のできごとを交互に対置する手法は、『死海のほとり』（1973・6刊行）で効果的に用いられているが、短篇でも「大部屋」（「新潮」1965・1）等で試みていたものである。「影に対して」はこうした手法に加えて、季節の移り変わりが（人物造形に）巧妙に組み込まれた作品でもある。以下、対置手法と季節の推移、「影」の変化に焦点を当て、本作を読み解く。

二

作品は、次のように始まる。

> 勝呂は畳に片手をついて、父の家に焼け残った古いアルバムをめくった。
> （中略）少年時代の彼の写真、父に撮ってもらったものである。高尾山に登った時の写真。丸坊主の彼がくたびれたような顔をして父と並んでいる。熱川

の海岸でうつした写真。これも父と一緒である。どの写真のなかでも、今の彼と同じ年頃の父は愛想笑いを浮かべていた。（彼は自分も写真をとられる時、この父と同じように、気の弱わそうな微笑を頬に浮かべることをふと考えた）そして、それらの写真のところどころに、あきらかに前にはそこに貼りつけてあったのに、剝ぎとった痕があった。糊のあとだけが灰色に乾いて残っている。彼はその写真にうつっていた人が何者か、その写真を誰が剝ぎとったのかを、もちろん、知っていた。（①段落　傍線引用者、以下同じ）

「少年時代の彼の写真」が貼られたアルバムは、②段落では「勝呂の子供時代をうつしたアルバム」とも記されているのだが、このような写真、アルバムは物語内の時系列に従うと、成立し得ないのではないだろうか。

この物語内の勝呂に関わるいちばん古い回想は、⑤段落の「三十年前」、繰り返しヴァイオリンを練習する母を子供の勝呂がゆさぶって果物をねだったものの、母に厳しく叱られたことである。「これが勝呂の幼年時代の母の思い出の一つだ」と断られているが、この舞台は大連である。勝呂は幼年時代、既に大連に住んでいたのである。

彼が父と日本に帰国したのは中学生の時で、それは小学六年生の時、母が父と離婚して帰国した翌年である（⑲段落）。帰国後、父は満鉄をやめて兵庫県の教育局に勤め、二人は六甲駅ちかくの家に住んだ。離婚した母は東京在住であった。その後いつ、勝呂父子が上京したのか不明だが、現在は勝呂も父も東京在住である。父が渋谷での買い物のついでに勝呂の家に立ち寄っている（⑥段落）ことから、勝呂の家が渋谷に近いこと、父の家はその勝呂の家から電車でベッタラ漬を持ち帰れる（㉑段落）、比較的近い距離にあることがうかがえる。(2)

⑦段落に「学生時代、あの写真帳が放りこんであった納戸のなかから偶然ポケット版の万葉集を見つけた」とあり、また⑥段落には十数年前に「「仏教訓話」などを書棚に並べてある書斎」で父から小説執筆を職業にすることを反対されたとある。物語現在の②段落で書斎に呼ばれた勝呂は「二十年前、彼が大学生だったころと何一つ変っていない」景色としてみている。ここから学生時代には既に上京していたことがうかがえる。

以上を整理すると、次のようになる。

幼年時代―大連在住

Ⓐ

小学六年生―両親離婚

中学生―父と帰国、兵庫県六甲駅ちかくに在住、母は東京在住

Ⓑ

大学生―既に上京

現在―勝呂一家も父も東京在住

この時系列からは、子供時代に東京多摩地方の高尾山の写真、静岡県熱川の写真を撮ったこと、しかもその「ところどころ」に母の写真が挟まっていて、それを剝ぎとったことは、かなり不自然な設定と言える。子供時代、まだ両親が離婚する前はⒶにあたるが、この期間、一家は大連にいた。⑲段落の日本に帰国した後の描写として、「はじめて見る日本の風物は、何もかもが汚なく、小さくみえた」とあり、大連時代に一時帰国、帰省はなかったと考えられる。一方、帰国後のⒷは兵庫県に住んでいたので、やはりわざわざ上京して高尾山に登るのも異なものである。しかも離婚後なのだから、そもそも母の写真は撮らないはずであり、剝ぎとる必要もない。(3)

このアルバムをめぐる設定の不自然さは、遠藤が意図して施したもので

あろうか。まず考えられるのは、まだそのような不整合の訂正が終わっていなかったことである。発見された「影に対して」は、完成原稿であり、清書までなされているが、出版社を通っていない作品[4]である。不整合が見落とされていることは充分考えられる。

だが、そうした事情を含んだとしても、遠藤は何としてもアルバムから写真が剝ぎとられる設定にしたかったのであろう。それは、「糊のあとだけが灰色に乾いて残っている」、すなわち「影」をそこに浮かびあがらせるためである。②段落では、次のように、明確に「影」を表現している。

> 勝呂のまぶたの裏にもう一度あの誰かが剝ぎとった写真の跡が――乾いた、きたない灰色の糊跡が――うかんだ。私はあなたが時折、作ってくれたホットケーキの味を憶えている。

「きたない」「糊跡」は「あなた」、つまり離婚してみじめな生活を送り、みじめに死んでいった母の「影」なのである。

ところで、ここでの「影」はこうした敗北者としての母を示すだけであろうか。というのは、冒頭に引用したアルバムの写真は、「父に撮ってもらったものである」としていながら、「高尾山に登った時の写真。丸坊主の彼がくたびれたような顔をして父と並んでいる。熱川の海岸でうつした写真。これも父と一緒である」とあり、そこには子供の勝呂と父を撮影した誰かが、写真には残らない「影」として存在しているのである。この時の父は「どの写真のなかでも」「愛想笑いを浮かべていた」が、それについて勝呂は「(彼は自分も写真をとられる時、この父と同じように、気の弱わそうな微笑を頬に浮かべることをふと考えた)」。「気の弱わそうな微笑」と言い換えられる「愛想笑い」は、人との関係を波風立たないようにするための行為であるが、誰に向けての「愛想笑い」だったのであろうか。とりたてて誰にということなく、こうしたポーズをとるのが癖になっていたのかもしれないが、これは勝呂の「子供時代」であるから、気弱な表情の父と子をカメラのレンズ越しにのぞいていたのは母と考えるのが妥当であろう。母は、写真には直接残らぬ「影」ではあるものの、父に気弱な表情を浮かべさせる強者、人生の勝者としてそこに存在し、その姿は物語の展開と共に次第次第にクローズアップされていく。

冒頭のアルバムは二つの「影」――「生活」の敗北者と「人生」の勝者――をその内に秘めているのである。

三

勝呂は見終えたアルバムを、「納戸の戸をあけて雑多なものが並んでいる一番上の棚に」「かくした」(①段落)。しかもその様子を見ていた妻が「あんな高いところに」と言うように、それは誰かの目に触れないように厳重にかくされているようである。誰の目を遠ざけているのであろうか。勝呂の行動を咎めた妻と、それを聞きつけてその場に現れた父の様子は次のように語られている。

> 「あのアルバムですの」妻は無思慮に答えた。「この人ったら、どうしてか、あんな高いところにかくして」
>
> 父はうつむいて黙っていた。黙ったまま、稔の手をもって風呂場につれていった。父はそのアルバムのなかに、幾枚かの写真が剝ぎとられていることを知っていた。

さらに②段落には「勝呂の子供時代をうつしたアルバムは、納戸の奥にか

くすようにしまわれて、長年、白い埃をかぶっている」とある。これは勝呂がかくしたのではなく、かくされていたのを見つけたということであろう。そしてこの場の父の反応から、写真を剝ぎとり、かくしたのが父であること、①②段落の義母に憚る様子から、父が後妻への配慮からかくしたものと知れる。ところが、それほど厳重にしまわれていたアルバムの発見でありながら、勝呂の驚きは描かれていない。納戸から持ち出して、またそっと戻す様子から、そう頻繁にではないものの（「長年、白い埃をかぶっている」程度の頻度で）、彼は何度か見ていることがうかがえる。

ではなぜ、この日勝呂は、わざわざアルバムを取り出してきて見ているのか。①段落で、アルバムを見ながら勝呂が目にしているのは、勝呂の息子、稔とその相手をしている父の姿である。二人は池の周りで鯉を数えている。稔が「父の手を握りしめているのが、勝呂には不愉快だった」。

理窟ではそういうことが理不尽だと彼はうち消そうとする。彼は眼をアルバムに落して剝ぎとられた写真のなかの人に心のなかで呟く。あなたは稔の顔をみずに死んだ。稔をだく悦びも持たなかった。稔の顔だけではなく、ぼくの妻の顔も知らない。あなたは今、この春の日曜日、嫁や孫に囲まれているあの父をどんな気持で眺めているのか。

この時、勝呂はa、bのみじめな敗北者としての母の「影」を意識している。勝呂は、この時はまだ母親の人生をたどる前であり、単に不遇な母親に思いを寄せる気持ちの方が強かったであろう。しかし、それだけではなく、父と稔を外側から見る視点は、アルバムの写真を撮った時の母の視点と重なるものである。つまり、強者としての母の「影」も読み取ることができる。

ところで、この日勝呂がアルバムを見ているのには、もう一つ理由があろう。それは季節との関わりである。このアルバムを開いているのは「春の日曜日」である。この物語は②段落の終わり、アルバムを見た日の帰り道での妻のひと言、「あなたの死んだお母さま」は「なぜ、お父さまと別れたのかしら」に端を発して、勝呂が自身の回想や母を知る人との面会を重ねて母の人生をたどり、やがてそれと対峙していき、その進行につれて「影」が実体をもって勝呂に迫ってくる話である。最初の回想として挙げられたのは、母が「ホットケーキにドリコノをたっぷりかけて食べさせてくれた」（②段落）ことであるが、実は、この母手作りのホットケーキのエピソードは、⑨段落に明かされるとおり特殊な思い出で、勝呂の発病・入院をきっかけに「ヴァイオリンを弾かなくなった」母を象徴するものである。「ヴァイオリンを弾かなくなった」やさしい母は、⑪段落には「満人の女中を指図して食事を作ったり、庭に花を植えたり、彼の勉強を手伝ってくれる。あの頃、勝呂には母の寂しさを感ずるよりは自分の手に戻った彼女との生活がただむしょうに嬉しかった」し、「父も満足そうだった」。しかしこのひとときの幸せは、母が自殺をはかって未遂となり、離婚する直前の限られた期間のできごとである。そしてその幸せは「チュウリップの苗」「庭のアカシヤに真白い花」等、春から初夏の風物と共に描かれている。春とともに思い出されるのはやさしい母であり、ヴァイオリンに専心していた厳しく強い母ではない。この記憶のゆえにこそ、アルバムを安心して開き、ありし日の母に心を添わせることができたのではないか。勝呂は後述するように母を裏切った過去を持っているからである。

四

次に季節の推移は物語にどのように組み込まれ、この一篇にいかなる効果をもたらしているのであろうか。

勝呂の母は「一生懸命生き」ること（⑲段落）、「自分の人生」（㉒段落）を生きることを求める女性であり、離婚後それを勝呂にも求めた。中学生の頃に久しぶりに再会したときには、「なんでもいいから」「自分しかできないと思うことを見つけて頂戴」（⑲段落）と話し、十八、九歳の時[5]に送られてきた手紙にも次のように認めていた。

「（前略）あなたもテクニックだけの人生を生きるような人間にならないでほしいと思いました。たとえ周りの人がそれを安楽だとすすめても。」（㉒段落）

「（前略）アスハルトの道は安全だから誰だって歩きます。危険がないから誰だって歩きます。でもうしろを振りかえってみれば、その安全な道には自分の足あとなんか一つだって残っていやしない。海の砂浜は歩きにくい。歩きにくいけれどもうしろをふりかえれば、自分の足あとが一つ一つ残っている。そんな人生を母さんはえらびました。あなたも決してアスハルトの道など歩くようなつまらぬ人生を送らないで下さい。（後略）」（㉒段落）

その厳しさ、烈しい「人生」への志向性は、先にも触れた⑤段落の勝呂の幼年時代の回想にも現れている。ヴァイオリンに専心していた母は、「繰りかえし三時間、たった一つの旋律だけを繰りかえし」、その「きびしい顔」を子供が「怖ろしそうに窺ってい」ても、「眼前の母の心をこちらに向けた」くて、果物をほしがってみせても、「求めているたった一つの音を指が探りあてるまでは子供の声など耳に入らなかった」。子供が「ヴァイオリンを弾いている間は決して話しかけたり、騒いだりしてはいけないと平生からきつく言われたのに」「その言いつけを忘れるほど不安にから れ」て、「母をゆさぶった」時には、「怖ろしい顔で」「睨みつけ叱りつけ」、「言いつけを聞けないなら、雪の中に立ってらっしゃい」と突き放した（⑤段落）。後の手紙に「テクニックだけではなく、もっと高いものが音楽にある筈なのに、母さんにはそれがいくら勉強してもまだつかめない」（㉒段落）と記した、その「高いもの」を徹底的に追求している彼女が、こうした彼女だけの「人生」を生きている時、いつも季節は冬であり、大連の雪と共に描かれている。

勝呂が小学校三年生の時[6]、母の演奏会が開かれた（⑧段落）。その前の練習にはいっそう熱が入り、「飽きることなく、一つの旋律だけを繰りかえし、繰りかえし、繰りかえしつづけている」が、「練習中は絶対に応接間に行くことは禁じられていたから、学校から帰って彼は母にまだ会っていなかった。他の子供なら淋しいと思うこんな仕打ちも勝呂には毎日のことだから、もう馴れきっている」状況になっている。帰宅した夫、勝呂の父も女中に「奥さん、よぶか」と問われて、「いや、いい。練習中なんだから……」と顔を合わせるのを諦めている様子である。この時季節は「凍雪の上にまた雪が降る」、大連の冬である。

加えてこの冬の設定は、彼女自身の厳しく、苛烈な「人生」追求だけを表象しているわけではない。父の姉夫婦は母のあり方に終始批判的であったし、離婚した後の父も母を暗に「軽蔑」するような物言いをした（⑥段落）。母の従兄の達さんも同様に「軽蔑」の口調で母を語った（③段落）。離婚後母が三年間勤めた学校の教え子、鮎川夫人も教え方の「きびし」さ

を指摘し、「先生は音楽にあたしたちが考えている以上のことをお求めになったもんですから、それに従いていけない方は」「やはり、色々、先生が理解できなかったんじゃありません」と、「母をもて余した」と受けとれるような言い方をした（⑱段落）。音楽学校時代の友人のSさんも「お節さんは結局……」「たづなを、しぼりすぎたのね」、「たづなを決してゆるめることがなかった。あれじゃあねぇ……」と批判した（㉔段落）。勝呂には同じ音楽を志す人たちまでもが「今は母の生き方を蔑むような言い方をするのは耐えられ」ず、「高いものを求めた」母が、「世間からこういう眼でみられている」と「烈しい怒りが胸をふきあげて」くるほどの侮辱と感じられた（㉔段落）。こうした逆境もまさしく冬であろう。鮎川夫人に面会したのは「つむじ風」の季節であり、Sさんとの面会もやはり冬まぢかと考えられる時期[7]であった。

遠藤が母を冬と共に描いたのは、この作品だけではなかった。一九六〇年代から一九七〇年代にかけて、小説の中で母を書き続けたが、多くの作品でその傾向が見られる。

「童話」（「群像」1963・1）は、父と母の仲が険悪になり、離婚するにあたりどちらに付いていくか選択する場面で、主人公ツトムが母を裏切るのが冬のはじめである。「雑種の犬」（「群像」1966・10）も両親の仲が険悪になるのが冬、「凍み雪」の季節で、学校から帰ると「暗い部屋のなかで灰色の石像のようにじっと坐ったまま何かを考えている母の姿を見たくなかった」ことが描かれている。

「影法師」（「新潮」1968・1）には「冬の朝だって母は僕が教会に行くことを怠るのを許」さず、「浪人二年目」の「十二月の末」、母をだまし映画館で過ごしたその日に母が急死したと書いている。この作品では母は「きつい性格」「烈しい性格」であることが繰り返され、「小心で安全な人生のアスファルト道を歩きたかった父にはこんな母の生き方が耐えられ」ず、「ぐうたらな僕」もまた「より高い世界の存在せねばならぬことを魂の奥に吹きこまれた」と、「影に対して」に近い内容が描かれている。「六日間の旅行[8]」（「群像」1968・1）も「烈しい女」であった母のエピソードとして、「三十年前の大連の冬」、「ねそべった私の前で母がヴァイオリンを飽くことなく弾きつづけている」様子を描き、「安全なアスファルト道を望んだ男にとっては結婚後、母の烈しさが耐えられなかったのだろう」ととらえ、「平凡が一番倖せだ。何も起らぬことが一番、倖せだ」と「口癖のように」言っていた父と対比している。「母なるもの」（「新潮」1969・1）でも「平生、すぐに思いだす母のイメージは、烈しく生きる女の姿」であり、「五歳の頃」に見た、大連の「小さな家の窓からさがっている魚の歯のような氷柱」とともに、ストイックにヴァイオリンの練習に励む姿が描かれている。さらに離婚後の様子として、

> 母は、むかしたった一つの音をさがしてヴァイオリンをひきつづけたように、その頃、たった一つの信仰を求めて、きびしい、孤独な生活を追い求めていた。冬の朝、まだ凍るような夜あけ、私はしばしば、母の部屋に灯がついているのをみた。彼女がその部屋のなかで何をしているかを私は知っていた。ロザリオを指でくりながら祈ったのである。それからやがて母は私をつれて、最初の阪急電車に乗り、ミサに出かけていく。

とある。

冬と重ねられるものが、不遇に耐える姿から「人生」を厳しく追求する姿勢へと変化してはいるが、遠藤の小説では母は冬と共に描かれる存在な

のである。

ところが先にも触れたように「影に対して」では、冬以外の季節の母も描かれている。小学校四年生の夏休み直前に勝呂が病気で入院した後、母の生活は一変する。入院中に奉天から大連に移ってきた父の姉夫婦は、母を許さなかった。母と伯母は病院で言い争いをし、伯母は「ヴァイオリンもいいけど、女はまず家をまとめるのが仕事だと思うけどね」と言い、さらに「たたみかけるように」、「この子が病気になったのも」「あんたが音楽ばかりにかまけて見てやらなかった為じゃないのかい」（⑨段落）と付け加えた。これに止めを刺されたのか、病院の付き添い時、勝呂が「うたた寝」をしたわずかの間でさえヴァイオリンの運指の練習していた母であったのに、勝呂の退院後は、きっぱりとヴァイオリンを弾かなくなったのである。「普通の母親と同じように、学校から戻る勝呂には」「ドリコノを沢山かけ」た「ホットケーキをよく作ってくれ」（⑨段落）、家庭の妻として、母として家族につくした。「平凡が一番いい」、「家族の誰も病気せず、何の風波もないのが倖せというものだ。平凡を笑う者は平凡に仕返しされる。人間、高望みをしてはいけない」と話す「父も満足そうだった」し、勝呂も「自分の手に戻った彼女との生活がただむしょうに嬉しかった」。ここで描かれるのが春から初夏の情景――「チュウリップの苗を植え」る父、「庭のアカシヤに真白い花が咲き」、「その花房を母からもらった香水瓶の中に入れて遊」ぶ勝呂である（⑪段落）。夏休み直前の勝呂の病から冬を経て、新たに夏を迎えようとするころである。ところが、家族の満足とは裏腹に、その夏（入院の翌年の夏）には、陰りが差している。

そんなある日、母は日傘をさしたまま勝呂をつれて黙って歩いていた。黙ったまま、どこまでも歩いた。勝呂が時々、話しかけても、哀しそうにうなずくだけで返事をしなかった。どこへ行くのと、訊ねても首をふるだけだった。やっとミルク・ホールで彼にアイスクリームをたべさせながら、自分はさじを取りあげようともせず、何かを考えこんでいた。

「どうしたの」勝呂はクリームを食べるのをやめて母の顔を見あげた。「元気ないよ。病気なの」

心配しなくていい、と母は首をふり哀しそうに微笑した。（⑪段落）

さらにヴァイオリンを弾かない二度目の冬、母の音楽学校の友人であるSさんが大連で演奏会を行い勝呂の家に泊まった時、ヴァイオリンを弾かなくなった母にSさんは意外との反応を示し、「倖せなの」と問う。「充分、満足していると母は、はっきりと答え」、「勝呂は嬉しい気持でその返事を聞いていた」が、大人になった現在は「音楽学校時代の友人への対抗心」を読み取っている（⑪段落）。重く、閉鎖的な冬が「人生」を生きられない母と重なっていく。その母と意気投合し、共感し合った父の弟が勝呂の家に滞在したのは三度目の夏、勝呂が六年生になった八月上旬から三週間であった。大学生の彼は「左翼運動に加わっており」、「警察から尾行されたことがたびたびあるらし」く、平穏よりも自分の「人生」を生きることを重視する男であった。彼は「姉さん。もう会えないかもしれないけど」「ぼくは自分の信念で生きます」との言葉を残して去り、「その年の冬」、「警察の尾行をまいて、行方を消してしまった」。これがヴァイオリンを弾かない三度目の冬である。この年「凍雪の上に新しい雪がふる毎日が続」いたある日、未遂に終わったものの母は服毒自殺を図り、退院後、父との口論が毎夜続き（⑭段落）、とうとう離婚、一人出て行った。勝呂

が父の説得を受け入れて、父と住むことを決めたからである（⑯⑰段落）。ここから母は再び厳しい「人生」の追求の日々に入っていく。

以上を整理すると、ヴァイオリンを弾かない、本来の母と異なる姿は穏やかな春とともに描かれ、葛藤の訪れるのが夏、人生の変わり目が訪れるのが冬との設定になっていることもうかがえる。

母が冬の女であるならば、父は何か。先の引用でも明らかなように、彼がもっとも生き生きと生活を楽しんでいるのは、春である（⑪段落）。さらに東京に暮らしている現在、夏はパナマ帽子をかぶって生クリーム菓子を手土産に孫に会いに来る（⑥段落）。勝呂が十八、九歳の頃[9]は月見をしながら、「こうして一家そろって、月見をする。結構なことだ」、「今年も何事もなく、だれからも後指をさされず……、これが幸福というもんだな」と「満足そうな横顔」（㉓段落）を見せる。人が穏やかな生活を楽しむ春から秋、これが父の季節である。なお、こうした父の季節の表象については他の作品にも類似が確認できる[10]。

五

登場人物の心象が一定の季節と結びつけて描かれているのは父と母だけではない。勝呂も季節の推移の中にあって苦悩する男として表されている。以下、母の「影」の変化と併せて読み関連を探る。

勝呂の現在は、アルバムをめくる「春の日曜日」に始まった。この時、母は二つの見えない「影」にすぎなかった。しかしこの後、回想や母の知人との面会を重ねるうちに形を変えていく。

最初は四年ほど前の達さんとの面会の回想であるが、母の家出の話を聞き、達さんの「ひたむきと言うか、一図（ママ）というか」「まあ、芯が強かったんやろうが」の口調のなかに「強い」「軽蔑」を感じ、「彼は眼をつぶってまぶたの裏にある母の影像をたぐり寄せた」（③段落）。この時点では自分だけが母の理解者であると強く感じている勝呂は、他者の母に対する認識の真意を探ることもない。母の「影」も彼自身がコントロールしている「影像」にすぎない。

五月には靴底の減り方をめぐって妻に「芯は臆病な意志の弱い性格」と言われ、自身もいつしか信念を枉げ、小説家としての道を諦めかけている弱さを思う。そうした「とも角も何とかやっていける毎日に住みついてしまおうとする自分の臆病さや弱さ」が「父ゆずりのものなのかも知れない」と思うゆえに、そうした「自分を軽蔑し」、「そんな時の父を嫌うことで抵抗しようとしてい」ることを自覚する。「母からゆずってもらったものが何かはまだ言えない」（④段落）ことが、さらなる回想につながっていく。⑤段落のヴァイオリンを弾いている母にきつく叱られた幼年時代の思い出を聞いた妻に、勝呂の母親「美化」の姿勢を指摘され、それは勝呂自身も認める。その上、小説を半ば諦めて生活のためと称して翻訳に逃げている彼にとって、ヴァイオリンに専心する母の姿、手や指先は思い出すにつれて、単なる「美化」や「懐かしさ以上のものになってしまっ」ている。見えなかった「影」が、次第に力を持ち始めているさまがうかがえる。

夏には、買い物のついでに勝呂の家に寄った父が、稔の芸術的才能を伸ばしてやれと言ったのを受けて、十数年前勝呂が小説家を志そうとした時、芸術を過小評価し、芸術家への軽蔑を露わにして、頭ごなしに遮った父の言葉を思い出す。そこに「みじめったらしく死んでいった」「母にたいする軽蔑が暗にふくまれているような気がした」のだが、この回想により、「住んでいる貧しいアパートで誰からも看られず死んでいった」母、「血の

気もなく紙より青白くなったその死顔の眉と眉との間に、苦しそうな暗い影が残っていた」さまが具体的に浮かびあがることになる（⑥段落）。今までは、見えない「影」、もしくは自分のまぶたの裏にある「影像」、「美化された」母であり、厳しく鍛錬し続ける手指が勝呂の弱さと対照的に語られる程度であったが、ここでは勝呂の甘さを鋭く突くような「苦しそうな暗い影」として捉えられている。関係性も、それまでの理解者としての母との〈対話〉から、「人生」を生きることをめぐっての〈対峙〉を余儀なくされ始めているのである。

次に注目したいのは、⑩段落とその前の⑨段落の連動である。⑩段落は翻訳の仕事で勝呂に臨時収入が入り、「祭の日」にデパートで親子三人買い物をしたり、食堂に入ったり、ささやかな倖せを味わったことが描かれている。勝呂はこの時「食堂で子供にはホットケーキを、妻にはアイスクリームをとって」やる。一方、直前の⑨段落は、小学四年生の時の勝呂の入院と、伯母が母を厳しく非難し、母がヴァイオリンを弾かなくなったことを回想したものである。母が「人生」を封印したことが、「ドリコノを沢山かけ」た「ホットケーキ」を作ってくれたことに象徴されている部分である。これを踏まえて読むと、勝呂がデパートの食堂で子供にとってやったホットケーキは、母の「人生」と引き替えにした独創的な手作りのものとは異なり、「生活」のための仕事で得た金で与えた、安易な出来合いである。十八、九歳の時、母から受け取った手紙の言葉で言えば、母のホットケーキは「海の砂浜の道」であるのに対し、勝呂のとってやったものは「アスハルト道」にすぎない。[11] 妻子を喜ばせ、「幸福感に似た感情がゆっくりと胸に湧いて」きたものの、それに浸ることもできない。

（前略）心の中で、こういう生活がなぜ悪いんだと急に考えた。なぜ今更、小説を書く必要があるんだ。俺はこうして結構やっているじゃないか。なぜこの結構な毎日を自分で恥ずかしがる必要があるんだと思った。その時、まるで残酷な悪戯のように勝呂の頭にあの母親の死顔が浮かんできた。（⑩段落）

「祭」は夏祭りであろうか、秋祭りであろうか。「屋上で子供を遊ばせた」ところを見ると、暑い夏ではなかろう。季節はゆっくりと着実に、厳しい母を思わせる冬に近づいていき、見えなかった「影」は、今や「苦しげな暗い影」を抱く顔として現れ、気弱で初心を貫くことを諦め、容易な道に流されつつある勝呂を厳しく見据える。先の、小説家になることを父に反対されたことを回想する場面では、勝呂が記憶を探りに行ったのに対し、ここでは「浮かんできた」とあり、〈対話〉の母ではなく、〈対峙〉の母に移行したことがはっきりとうかがえる。

その後の回想は、音楽学校時代の友人Sさんとの問答（⑪段落）、父の弟（勝呂の叔父）との互いに理解し共感し合った三週間とその冬の叔父の失踪（⑫段落）、さらに母の自殺未遂（⑭段落）と続き、これらを通してヴァイオリンを弾かず、「人生」を生きることを奪われ、「生活」を余儀なくされた母の苦悩が描かれる。そしてこれらの回想は、今までと異なる勝呂を現出させている（⑮段落）。彼は豪雨の後の雨上がり（季節は特定できない）に「頭のどこかでお前の生き方は嘘だという声が聞えてくるよう」に思い、妻に「もう一度、生活をやりなおさないか」、「こういう生活は自分を偽っているような気がする」と提案したのである。「影」は今や彼の行動を左右するほど大きな存在となっていることがうかがえる。そして、この時の勝呂は〈対峙〉ではなく一歩踏み込んだ〈受容〉と〈模倣〉を目指

したのである。だが、平凡な「生活」を重視する妻にその意図は通じず、「馬鹿にしたように」「ふりかえっ」て、「子供みたい。あなたの言うこと」と言われたのみであった。冬の女である母がひとり乗り越えていった他者の無理解・批判を勝呂は乗り越えられなかった。彼は妻にひとことも言い返すことができなかったばかりでなく、息子をつれて散歩という形の撤退をしてしまった。

この時を境に、勝呂は母に自らを近づけ、「人生」を歩む努力をしなくなっている。回想も、父と母の離婚、それに伴う三度の裏切り――母を見棄てた一度目の裏切り（⑯段落）、帰国後、母との手紙のやりとりで母の期待に応えられないが「一人で遠くに生活している母を傷つけたく」ないが故に嘘をつき続けた二度目の裏切り（⑳段落）、母を必要とする息子の年齢故に父が再婚し、「結果的に自分が母を一歩一歩孤独にさせ、見棄てる生活に落ちていく」、すなわち三度目の裏切り（⑳段落）――となっていく。これは、母の生き方からの乖離を表していないか。この回想の合間に語られる、教え子鮎川夫人の母への批判は、離婚後の孤独の中でも信念を枉げず、自分だけの「人生」を追求し続けた強い母のエピソードでもある。これを勝呂が聞いたのは「つむじ風」の吹く季節にさしかかってのことである。

さらに季節が進み、ベッタラ漬を持たされる冬、まぢかの頃、勝呂は父の書いた原稿を受け取ってしまう。出版社に取り次ぐ依頼を「老人の懸命な顔を見るとつい憐憫の情に駆られて」断れなかった（㉑段落）からである。㉓段落にもかつての父と義母との月見の晩の回想に、「父の浸っている安穏な幸福の背後に孤独な女が一人いたことを忘れているのだろうか。父と義母にたいするかすかな憎しみに駆られ」ながらも、話しかけられれば「仕方なく弱々しい微笑を頬にうかべ」、「そんな愛想笑いをうかべた自分にたまらない嫌悪を感じた」ことが示されていた。「孤独な女が一人いた」から、母が既に亡くなっていることがうかがえる。勝呂は当然母の死顔を思い浮かべているはずであるのに、それでも「愛想笑いをうかべ」てしまう。「愛想笑い」は、「平凡が一番」と考える父の無意識の武器である。「心臓が悪い」母の必死の願いであった〈アスハルトの道をあるくな〉という戒めよりも、「父と同じように安穏で何事もない人生を歩こうとする傾向」（㉒段落）が勝ってしまうことを示している。

物語終盤、Sさんとの面会も冬、まぢかのことである。Sさんは、「人生」を追求しつづけた「母の生き方を蔑むような」評価を下した。勝呂は、「烈しい怒り」を感じ、世間の無理解に対して「あなたたちには母の生き方がわかるまい。あなたたちがわからなくても、子供の俺にはわかる」と「呟きつづける」が、「そのくせ、家に戻ると彼の興奮は幾分、おさま」り、「生活」のための翻訳の仕事に取りかかる。母の「人生」を生きる姿は、この時の勝呂を動かしてはおらず、回想したにもかかわらず、母の手紙の要求からは依然として遠いところにいる。

稔の「病院費」を「お父さまに拝借できないかしら」と頼む妻に対しても「親爺なんかには借りたくない」「お前の着物を売れ」とごね続けるのみで、その意味では彼は「生活」も支えていない。そうした勝呂に対する妻の「あなたには父を軽蔑する資格なんかないわ」、「あなたなんか、お父さまぐらいにも、なれないんじゃありませんか」との侮辱は、ある意味、勝呂を鞭打つ母の声でもあったであろう。「妻を撲ろうとしたが、撲れなかった」勝呂は、「うつむいて母の死顔を思いうかべた。暗いアパートの一室、ゴムの植木鉢が片隅におかれており、母の青白い額にはまだ苦しそ

うな翳が残っていた」（㉔段落）と作品は閉じられているが、「ゴムの植木鉢」は⑥段落に示されているように、掃除のし残しを示すものとして、現実的で横着な妻と、練習に専念する故に「生活」には手が回らなかったのであろう母を唯一結びつけているものだからである。この時「思いうかべた」「母の死顔」は、「子供の俺にはわかる」と思っていた母の世界が自分には到底届かないほど遠いところにあることを突きつけるものであった。

以上、勝呂は春の日曜日から、冬まぢかの頃へと季節が移るなかで、母の「影」と〈対話〉し、〈対峙〉し、倣おうとしたが、冬の女の季節が近づくにつれて、「影」はいつしか勝呂の手の届かない強烈な「光」となっていった。そして、「アスハルトの道など歩くようなつまらぬ人生を送らないで」との母の言（㉒段落）を体現し得ない勝呂の弱さと、母を裏切ったうしろめたさを「影」として浮かびあがらせる。つまり勝呂自身が「光」なる母に対しての「影」となってしまうのである。さらにこの「影」はまぎれもなく父ゆずりのものとして、今後勝呂が目を背けずに対していかねばならぬものなのである。

六

長崎市遠藤周作文学館の学芸員で、今回の作品発見者である川﨑友理子氏によれば、

（前略）秘書による清書原稿に書かれた題字（題字と署名は本人）を見ると、「燭影」という文字が消しゴムで消された跡が残っており、当初の題「燭影」から「影に対して」に変更されたことがわかる[12]（後略）。

とのことである。「燭影」とは「ともしびにうつるかげ。また、灯火の光。火影（ほかげ）」（Japanknowledge版『日本国語大辞典』）の意であるが、「ともしびが映し出す人や物の影」（Japanknowledge版『新選漢和辞典Web版』）の意味もある。勝呂が灯をかかげて（回想や知人への面会）、母の「影」（人生）をあぶり出していった点においては、「燭影」は相応しい。しかし、本稿で読み解いてきたように、この作品は単に母の「影」をあぶり出すだけではなく、その母の「影」と勝呂がどのように向き合ったのか、さらにはその関係の変化に伴い、最後には「光」と「影」が逆転してしまったさまを描いている。「影に対して」の方がよりこの作品を包括的にとらえたタイトルと言えよう。そして、その逆転を支えているのが、現在と回想を対置する構成と季節の推移の組み込みなのである。

注

（1）「影に対して」は一行空きで区切られた全二十四段落で構成されている。本稿では便宜上、①～㉔でそれを示す。

（2）遠藤の実生活における目黒区駒場の自宅と、世田谷区経堂の実家との距離感が想起される。

（3）今のデジタル写真と異なり、当時はフィルム写真であろうから、一つのフィルムには日時順に写したものが残り、入れ替えも削除もできない。写真現像もそのフィルムごととなる。そして多くの場合、写真のアルバム整理もフィルムごとであろう。つまり、母の写真は行動を共にしたゆえにアルバムに並べて貼られてしまったのだと考えられる。なお、『影に対して　母をめぐる物語』（2020・10・30、新潮社）の見返しには長崎市遠藤周作文学館蔵の遠藤の自筆原稿の一部が印刷されているが、「今の彼と同じ年頃の父」は、元は「まだ若かった頃の父」となっていたことがうかがえる。や

はり遠藤としてはⒶの時期を想定したのだろう。

（4）『遠藤周作　珠玉のエッセイ展――〈生活〉と〈人生〉の違い――』（2020・7・1、長崎市遠藤周作文学館）には、「遠藤の字でも秘書の字でもない鉛筆書きによる、誤字や内容の矛盾に対する指摘の跡も見られるが、出版社の印などはない」とある。

（5）㉒段落の手紙には、「もう八年も会って」いなかった「Sさんの音楽会に行ってき」たことの感想が認められている。前回会ったのが勝呂の小学五年生の時の大連でのこと（⑪段落）とすると、十八、九歳と考えられる。

（6）小学五年生の冬、音楽学校時代の友人Sさんが演奏会のため、大連に来て、勝呂の家に泊まった。その頃約一年、母はヴァイオリンを弾かない生活を送っていた。そのきっかけが前年（小学四年生にあたる）夏休み直前の勝呂の病気・入院である。そしてそれは「母の演奏会のあった翌年」と設定されているので、母の演奏会は三年生の時と推測できる。

（7）勝呂が実家からベッタラ漬を持って帰った日に、稔が入院し、その二日後にSさんと会っている。ベッタラ漬は「大根をなまぼしにして、薄塩と麹（こうじ）で漬け込んだもの」（Japanknowledge版『日本国語大辞典』）である。ちなみに東京ではそのベッタラ漬を売る市が立つ。

大根を甘く浅漬けにしたべったら漬けを売る露店が、宝田恵比寿神社を中心に、旧大伝馬町一帯（日本橋本町三丁目、大伝馬町）また堀留町にかけてに並ぶ「日本橋恵比寿講べったら市」。江戸時代の中期、宝田恵比寿神社の門前で10月20日の恵比寿講（商家で恵比須をまつり、親類・知人を招いて祝う行事）にお供えするため、前日の19日に市が立ち、魚や野菜、神棚などが売られるようになったのが起源だという。（GO TOKYO東京の観光公式サイト「東京都心部日本橋　日本橋恵比寿講べったら市」https://www.gotokyo.org/jp/spot/ev137/index.html　2020年11月30日閲覧）。

これを参考にすると、秋の半ば以降、冬まぢかの時期が推定できる。

（8）この「影に対して」と「六日間の旅行」の設定の類似については加藤宗哉氏が、榎本瑞希「遠藤周作の未発表小説見つかる　死去後初の純文学作品」（朝日新聞デジタル　2020・6・26、14時11分）等でふれている。

（9）㉓段落の月見の場面は「時々、阪急電車が音をたてて通りすぎた」とあるので、大学生となって上京する前、手紙で心臓の不調を訴えていた母が亡くなった後と考えられる。

（10）「私のもの」では「庭で盆栽をいじっている父」と描かれている。「影法師」でも「経営している会社の余暇には、盆栽をいじり、庭の芝生の手入れをし、ラジオの野球中継をきくような生活」であり、「母と二人っきりで過したきびしい日常とは全くちがってい」た、「あそこでは冬の朝、母に起された僕は霜で固まった道を教会に行った」と明瞭に対比されている。

（11）ここまで読むのは穿ちすぎかもしれないが、ドリコノをかけたホットケーキは、②、⑨段落の二回にわたり登場し、ヴァイオリンを弾く「人生」を失った母が代わりとして手がけたものの一つと見ることもできる。以前は、女中を通して果物を与えるにすぎなかったからである。さらに作品中、菓子は何度か登場するが、手作りと明記されているのは、この母のホットケーキのみである。アイスクリームも⑪段落で考えこんだ母が手をつけなかったものである。

（12）川﨑友理子「「影に対して」発見と企画展」（「遠藤周作学会　会報」15号、2020・10・10）。

本文引用は以下の文献に拠り、便宜上ルビは省略した。

・「影に対して」（『影に対して　母をめぐる物語』２０２０・10・30、新潮社に所収）
・「雑種の犬」（『遠藤周作文学全集』7、１９９９・11・10、新潮社に所収）
・「影法師」（『遠藤周作文学全集』7、１９９９・11・10、新潮社に所収）
・「六日間の旅行」（『遠藤周作文学全集』7、１９９９・11・10、新潮社に所収）
・「母なるもの」（『遠藤周作文学全集』8、１９９９・12・10、新潮社に所収）

「影に対して」時系列一覧

【母の若い頃】③

・女学校の時からヴァイオリンを習う。
・卒業後、上野の音楽学校に入学を希望したが両親の反対に遭い、家出。旅費と生活費を作るため、姫路で女中をする。

【勝呂の幼年時代　三十年前】⑤

・冬、ヴァイオリンを練習する母。三時間、たった一つの旋律だけを繰りかえし、子供の勝呂がゆさぶると叱りつけた。

【小学校三年生　母の演奏会のあった年】⑧

・冬、ヴァイオリンを練習する母。
・母の演奏会。

【小学校四年生　母の演奏会のあった翌年】⑨

・夏休みになる頃、勝呂、最初の大きな病気で入院。
・入院中、奉天から大連へ伯父・伯母（父の姉夫婦）が来る。母、退院後もヴァイオリンは弾かず、ドリコノをかけたホットケーキをよく作ってくれる。

【小学校五年生】⑪

・初夏にかけて長い間ヴァイオリンを弾かない母。母との生活をむしょうに嬉しく思う。父も満足そうに見える。
・一年つづいた。
・夏、ミルク・ホールで何か考えこんでいる母。
・冬、母の音楽学校時代の友人、Ｓさんが演奏会で大連に来る。演奏会後、勝呂宅に宿泊。Ｓさんと母が「倖せ」をめぐり問答する。

【小学校六年生　二十数年前】⑫⑭⑯⑰

・夏、八月上旬から三週間、父の一番下の弟（栄三　左翼運動に参加する大学生）が大連に来て滞在する。その年の冬以降、叔父は行方を消す。⑫
・冬（父の弟が来た半年後）、母が自殺をはかる。五日後退院。毎夜、父と母は口論する。⑭
・冬、父に散歩に連れ出され、父と母が別居することを聞かされる。父の説得を受けて、父と一緒に住む方を選択する。〈一度目の裏切り〉⑯
・一週間後、勝呂が寝ているうちに母出発。⑰

【中学生　母が帰国した翌年】⑲⑳

・父と帰国。父は満鉄をやめて兵庫県教育局に就職。六甲駅ちかくの家に住む。母は東京在住。⑲
・九月、大連から伯母が来て、母の二回の転職を聞く。
・母との再会「なんでもいいから」「自分しかできないと思うことを見つけて頂戴」と言う。⑲
・手紙で母に嘘をつき続ける。〈二度目の裏切り〉⑳
・年の暮、大連から伯母が一家の日本引きあげの下準備のため来る。父のための縁談も用意してくる。〈三度目の裏切り〉⑳

【十八歳か十九歳】⑥㉒㉓

・母の手紙。八年ぶりに会ったＳさんの音楽会を批判し、自分の来し方を振り

返り、「あなたも決してアスハルトの道など歩くようなつまらぬ人生を送らないで」とのメッセージと、心臓の具合が悪いことが書かれていた。㉒

・母の死。⑥

・父、義母と三人で月見をする。㉓

【学生時代　二十年前】②⑦

・父に文学部に入ることを反対され、二年ほど家を出されて人の家にあずけられる。②

・勝呂が大学生の頃から父の書棚には仏教訓話集、生長の家の全集があった。②

・納戸でポケット版の万葉集（父から母への贈り物で表紙裏に二人の名と相聞の歌の書きつけあり）を見つけた。⑦

【十数年前】⑥

・父に小説執筆を職業などにしてはいけない、芸術などまともな人間なら手をつけないものだと言われる。

【六年前】④

・まだ娘だった妻を渋谷の喫茶店につれこみ、自分が人生にたいして勇気をもった青年のようなふりをする。一ヶ月後婚約。

【五年前】④

・結婚。

【四年ほど前】③

・秋、母の故郷で従兄の「達さん」（五十五、六才の町医者）に面会、母の家出話を聞く。母の通った小学校も見る。

【今年の三月】①②

・父　教職（高校）をやめた。

【今年の春の日曜日】①②

・母の写真が剝ぎとられた古いアルバムを見る。

・父が執筆した李商隠の伝記の出版の中継ぎを父に依頼される。

【今年の五月】④

・靴底の減り方から芯は臆病な意志の弱い性格だと妻に言われ、こたえる。

・同人仲間（小説を書こうとしている仲間）との定期的な集まりに参加する。

・帰宅後、妻に稔とも父とも似ていると指摘され、夜、父母からそれぞれゆずってもらったものを考える。

・妻に別れるとしたらどういう時か、今みたいな生活に不満ではないか尋ねる。妻は、結局何も起らないということが一番、幸福と答える。

【今年の夏】⑥

・渋谷での買物のついでに父が寄る。稔（五才）をほめる。勝呂は十数年前のこと、父の芸術家への軽視と母の死を思い出す。稔と一緒に洋菓子をつまむ倖せそうな父にたまらない怒りを感じる。

・妻のいい加減な掃除に、死んだ母の部屋も同じだったことを思い出す。

【今年の祭の日】⑩

・臨時収入（二万円　三ヶ月前に翻訳した推理小説が売れた）が入り、デパートで妻に帯、自分に外国製の万年筆を買い、屋上で遊ぶ。子供にホットケーキを食べさせる。こういう生活がなぜ悪いんだ、なぜ今更小説を書く必要があるんだと思うが、その時、残酷な悪戯のように母の死顔が浮かぶ。

【今年】⑬

・上京した「達さん」と喫茶店で会う。「節さんは」「ええ細君にはなれん人だった」「めんどりが刻を告げてはいけません」との批判を聞く。

・帰宅後、妻から週に二度ほど刺繍を習いに行きたいと言われるが、許さない。

【今年】⑮

・烈しい雨のあとの陽ざしに、急に悔恨とも自責ともつかぬ感情が胸をつきあげ、お前の生き方は嘘だという声が聞えてくるような気がする。妻に「もう一度、生活をやりなおさないか」と言うが、馬鹿にしたように「子供みたい」と一蹴される。

【今年のつむじ風の吹く頃】⑱

・鮎川夫人（大連から引き上げた後、母が三年間学校で音楽を教えた際の教え子）に会い、母のことを聞く。「教え方がきびしく、音楽に対してあたしたちが考えている以上のことをお求めになったので、従いていけない大概の方は先生が理解できなかった」との批判を聞く。

【今年の秋から冬まぢかの頃】㉑

・父から李商隠の原稿を預かる。ベッタラ漬を土産にもらう。

・稔が発熱、入院する。

【今年　稔が入院して二日】㉔

・帝国ホテルのロビーでSさんに会い、母は「たづなを、しぼりすぎた」と言われる。

・帰宅後、妻から病院費の不足を切り出され、父に借りられないかと言われる。借りたくない勝呂はお前の着物を売れという。妻に「あなたには父を軽蔑する資格なんかない」、「あなたなんか、お父さまぐらいにも、なれないんじゃありませんか」と言われる。撲ろうとしたが撲れず、母の死顔を思いうかべる。

（ふえき　みか　　日本語日本文学科）